

ばるともよめり事也、雞のねたらんは、ことに夜にそへ、亥は雞く鳥にな。とこよの雞あさく時神樂をしにて常世の鳥もなきくとこよの鳥とは、日神、天の岩戸にこもらせ給し也、ねざめ雞あり玉に。逢坂のゆふつけになく雞のね後撰 空なきしつる雞の聲一深夜にまづは又れし夕つけとり

## 〔袖中抄二十一〕ゆふつけどり

逢坂の夕付鳥にあらばこそ君が行來をなくくもみめ

顯昭云夕つけとりとは、にはとりを云也、よの中さわがしき時、四境祭とて、おほやけのせさせ給に、鶏に木綿をつけて、四方ノ關にいたりて祭也、逢坂は東の關なればかく讀り。

〔東雅禽鳥〕雞ニハツトリ 日神、天磐屋戸をさしこもり給ひし時、思兼神、常世長鳴鳥を集めて、鳴しめられしと見えしは、舊事古事、日鶏をいふと云ひ傳へしなり、さらばニハツトリとは、齋場の鳥なるを云ひしなるべし、一に木綿付鳥などいひしも、此事にや因りぬらん。○中又唯よのつね人家の庭に棲む鳥なれば、かく云ひしも知るべからず、萬葉集に、雞の字讀てカケと云ひしは、東國の方言といふなり、仙覺抄には、カケとは啼聲に因りていへりと見えたり、古歌にカケロと鳴くなどよみし、これなるべし、古の俗、その啼聲によりて、名づけ呼びし鳥もありとは見えたり、家雞の字讀てカケといふなどいへど、凡そ事には依りぬれど、古の方俗の言に、夫等の字義に因りし事あるべしとも思はれず、

〔圓珠庵雜記〕には鳥をばたゝ鳥ともかけともよめり、かけは、かけろとなく、こゑよりつけたるなり、

〔倭訓栢前編十八〕とり略 中 雞は平生人家に在をもて、とりの名を專にせり、戀の歌に多くよめるは、天寶遺事の、名妓劉國容が歡寢方濃恨雞聲之斷愛といへる意也、